

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
自信と誇りを持ち、自ら学び、心豊かにたくましく生き抜く西溪っ子の育成	①小中一貫教育の充実を図る。 ②自ら学び：学ぶ意欲、課題解決力、考える力を育てる。(知) ③心豊かに：自他の良さを認め、思いやりのある心[恕]を育てる。(徳) ④たくましく：困難に努力し、体を鍛える。(体・食)

達成度	A: ほぼ達成できた B: 概ね達成できた C: やや不十分である D: 不十分である
-----	------------------------------------------------------

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

①小中一貫教育の充実を図る。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○小中一貫教育	小中一貫教育の充実による義務教育学校の推進	・前期後期相互授業参観を各自年4回以上行う。 ・児童生徒のことをその日のうちに確実に情報共有を行う。	・道徳2時間、教科2時間以上を参観し、授業評価シートを活用する。 ・把握した内容をその日のうちに、メモを活用し要点をおさえて伝える。	A	・道徳の授業参観は、全校研を年3回、学年グループ事前研を1~2回の実施ができた。・複数教科において、授業参観もしくは後期一前期の乗り入れ授業ができたので、さらに拡大したい。 ・生徒指導、教育相談、健康面、家庭状況、進路指導において、24時間以内に管理職及び主任に周知し共通理解を得ることができた。	・空き時間の利用や、管理職や級外職員が補欠に入るなどして、年1回は相互の授業参観を行う。その際、簡潔な参観シートを渡すようにする。 ・9年間の教科書コーナーを設置し、見通しを持った教科指導を行う。
	○地域連携	学校運営協議会の活用と連携体制づくり	・コミュニティスクールとして、学校運営協議会において、連携について見直しを行う。	・地域人材バンクの整理を行う。 ・学校教育活動に係る情報発信を行う。	B	・コミュニティスクールフェスタが定着し、保護者や地域の方の参加も増えた。 ・学ぶんジャーさんの活動が周知され、保護者などの参加も増えてきた。	・教育活動の中で、地域人材を活用できるように、人材バンクに整理をさらに図る。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	限られた時間における校務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進する。 ・教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比、平均30%以上削減する。	・クラウド上で各分掌が情報共有を行いやすいように、フォルダ構成を工夫する。 ・出勤システムで各教職員の勤務時間を確実に把握し、改善に努める。 ・特定の職員に業務が集中しないようマネジメントを行う。	B	・校務分掌ごとにフォルダを整理し、次年度への引継ぎをスムーズに行えるようにした。 ・職員の出退勤時間の把握のために、毎日PCに入力させ、自身の勤務状況把握の意識向上を図った。 ・職員の時間外勤務の1か月当たり平均を約30%削減することができた。 ・職員の職務遂行状況を常に把握していった。	・クラウド内のLとRでの整理が曖昧のため、振分け基準を設定する。 ・毎日、出退勤時間のPCへの入力を徹底し、正確な勤務時間の把握に努める。 ・業務改善を推進し、時間外勤務の削減をさらに図る。

②自ら学び：学ぶ意欲、課題解決力、考える力を育てる。(知)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	基礎基本を身に付けた自ら学ぶ児童生徒の育成	・CRT検査、全国・県学習状況調査において、全国・県平均を上回る。 ・校内研修において、「学び合い」の視点を取り入れた授業実践を行う。	・学力向上対策シートを活用し、取り組みの工夫改善を行い、また補充学習や個別指導を行う。 ・前期後期各分掌で、取り組みの進捗状況を月に1回確認する。 ・「学び合い」のポイントを明確にした授業研修会を行う。 ・家庭と連携し、家庭学習の充実を図る。	B	・学習状況調査において、中高学年Gでは、県平均正答率を上回った。低学年Gにおいては、全国・県平均に届いていない。 ・「学びあい」のポイントについては、校内研究において道徳の授業研究会の視点の一つとして研修を行うことができた。 ・「学び週間」の取り組みによって、家庭学習習慣の定着について家庭と連携をとることができたが、まだ十分とはいえない。	・基礎学力の定着のために、「学び週間」のチェック表をもとに個別に指導を行い、家庭学習習慣の定着を図る。 ・調査では県平均を上回っている中高学年を含めて、全学年で諸調査をもとに一人一人のつまずきに応じて、補充学習や個別指導を継続して行っていく。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実践	学力向上を支えるICT機器の効果的活用	・ICT機器を利用した授業を、分かりやすいと感じる児童生徒の割合を80%以上にする。 ・ICT支援員の効果的な活用を図る。	・デジタル教科書、自作スライド等を活用した各教科の授業を、前期1日1時間、後期週2回以上を目安に行う。	A	・PC、電子黒板、校内LANの整備が完了し、各教科でデジタル教科書などを利用した授業に取り組むことができた。児童生徒も視覚や聴覚から情報を獲得することができ、好意的に感じている。ICT支援員の援助で困った問題も解決することができた。	・現在の、使用状況を維持していく。また、新しい情報を得るために使用したり、情報共有のツールとしてタブレットの利用を推進していく。

③心豊かに：自他の良さを認め、思いやりのある心[恕]を育てる。(徳)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	自己のあり方について主体的・実践的に考える児童生徒の育成	・道徳性の児童意識調査において、自己肯定感や自律にかかわる項目で、3.5ポイント以上に上げる。 ・挨拶、靴そろえ、ごみ拾いができる児童生徒の割合を、90%以上に上げる。	・全体授業研究会を年3回実施し、道徳の授業づくりの工夫改善を行う。 ・グループエンカウンター等を実践し、何でも言い合える学級づくりを行う。 ・学級や学年の実態に応じて、日常的活動を行わせたり、専門委員会や生徒会活動に取り入れたいりする。	B	・児童生徒の道徳性に関する意識調査の結果、「節度ある行動をする子」「自信と誇りのある子」「目標をもち根気強く取り組む子」の児童生徒像に係る項目で、ポイントの上昇がみられた。道徳の授業の工夫・改善や「心の木」をはじめとする環境整備の取組の成果であると考えられる。しかし、ポイントとしては多くの項目で3.5を下回っており、今後も継続して取り組んでいく必要がある。	・児童生徒が考え、議論する場面(「あくしゅタイム」)の設定を中心に、授業づくりの工夫・改善を行っていく。 ・「心の木」や「スピーチタイム」など、日常の言語活動を充実させ、児童生徒の心の交流を図る取組を継続していく。 ・グループエンカウンター等を実践し、学級の支持的風土づくりに取り組んでいく。
	●いじめの問題への対応	いじめの防止の継続的、計画的な実践	・いじめ見逃しゼロを達成する。 ・未然防止、早期発見、早期対応、再発防止に努める。	・全教職員で連携し、日々の児童生徒の様子を把握し情報の共有化に努める。 ・定期的なアンケートを実施したり、生活ノート等簡単な日記を書かせたりし、児童生徒の小さな変化を見逃さない。 ・人権学習の内容に、いじめに気付きにくい内容に年1回以上取り扱う。 ・家庭における些細な気付きでも、学校へ知らせてもらえるように啓発する。	A	定期的なアンケートの実施し、いじめの早期発見及び、迅速な対応ができた。 前期・後期の学年間を超えての密な連絡と交流により、情報共有と問題解決を図ることができた。 ・人権学習や定期的な集会でのことばの学習や思いやりの心の醸成によるいじめ防止の心の育成ができた。	全職員で学年を超えた対応や情報共有を継続していく。 アンケートの定期的な実施を継続、児童生徒の小さな気づきを把握して対応していくこと。
学校運営	○生徒指導	生徒指導及び教育相談体制の充実	・予防及び開発的な生徒指導による問題の未然防止を図る。 ・SC及びSSWと連携した教育相談体制を充実させる。	・情報共有を行うため、前期及び後期職員合同による生徒指導協議会を定例化する。 ・Q-Uの活用及び研修会を行う。 ・事案について、正確な情報を共有し、具体的な対応をチームで取り組む。	B	・児童生徒指導協議会を毎月行うことで、前期、後期の児童生徒の情報を共通理解でき、指導支援に役立てることができた。 ・QUの研修会が台風の影響でできなかったため、各クラスでの分析で終わってしまい、学校全体での取り組みができなかった。 ・ケース会議などを行い、共通理解のもとチームとして対応できた。	今年度の取り組みで、成果があったものは継続して行う。また、QUの全体研修会を行い、学校全体としての取り組みを実践していきたい。

④たくましく：困難に努力し、体を鍛える。(体・食)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の育成と健康づくりの推進	・保護者と連携し、「早寝早起き朝ご飯」を実践し、朝食喫食率95%以上に上げる。 ・体を鍛える体育的活動を充実させる。	・食育に係る児童生徒用アンケートを実施し、実態把握を行う。 ・栄養教諭と連携し、食育の授業実践を計画的に行う。 ・保護者へ児童生徒の実態や授業実践等の情報を提供をし、食育に係る啓発を行う。 ・楽しく継続的に運動できるように、外遊びやスポーツチャレンジ等に取り組む。	B	・アンケート結果により喫食率は、全体的に向上した。結果を踏まえて授業実践が行われた。 ・前期課程は、スポーツチャレンジを全学年実施した。 ・後期課程は、発達段階に応じたスポーツに取り組んだ。 ・高学年になるほど、睡眠時間が減少する傾向がある。	・学級だよりなどで、保護者向けの食育に関する啓発活動を掲載する。 ・体づくり運動を授業内に積極的に取り入れる。 ・前年度の活動内容に関して、アンケート調査の結果を踏まえて継続実施する。

本年度の重点目標に含まれない評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	○特別支援教育	特別支援教育の充実	・実態把握と個に応じた支援の充実を図る。	・個別の教育支援計画及び指導計画に基づいた支援を行う。 ・学校教育支援員の活用や外部機関との連携を図り、適切な支援体制をつくる。 ・PCを用い、特別支援学級の児童生徒がピアジョイントトレーニング等を行う。	A	・入級している児童生徒に関しては支援計画通りに進めることで、家庭と学校の共通認識のもとに進めることで、社会性などへの効果がみられた。 ・入級していない児童生徒の支援体制構築が難しかった。 ・PCのソフトやアプリによって特性に応じたトレーニングができた。	・入級していない児童生徒の個別の支援計画を作成しており、それに沿った支援をしていく。 ・校内研修で、発達障害理解や指導時の言葉かけなどの共通理解を図る。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・小中一貫教育、ICT活用教育、いじめ問題対応、特別支援教育においては、ほぼ目標達成となった。これには、職員の意識向上が大きく関わっていると考える。さらに、現状維持を続ける。
・今年度から、働き方改革の視点をもって業務を行うように呼び掛けてきたところ、昨年度と比べ退勤時間が早くなってきた。職員皆がさらに効率の良く業務遂行ができるよう、校務分掌の見直しや行事精選、メリハリのある働き方(個人業務への軽重の付け方、打ち合せ会の効率化)を行う。
・各担当から出されている具体的な改善策を無理なく実行できるように、年間計画と照らし合わせながら吟味し時期的な見直しをもつようにする。
・よりよい授業実践や学級づくりのためには、入念なる準備と児童生徒の実態に応じた対応が必要になるので、そのための時間と合理的配慮を意識した指導の研修を行っていく。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目